金代字書研究概況

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2019-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大岩本, 幸次 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20200416-002

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	金代字書研究概況
Author	大岩本, 幸次
Citation	人文研究. 71 巻, p.143-156.
Issue Date	2020-03-31
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	進藤雄三教授 ： 関茂樹教授 ： 塚田孝教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第71巻　2020年3月　143頁～156頁

金代字書研究概況

大岩本幸次

金代の字書資料については、1950年代から1980年代にかけて、音韻史・字書史における『五音集韻』『五音篇海』の位置づけを試みる研究が行われ、二書の構成や反切の特徴、他資料との関連などに関して基礎的な知見が蓄積した。1990年以降になり、先述の二書や『群籍玉篇』の校本・影印本が公刊されると、個々の文字レベルでの精密な考察も可能となり、『五音集韻』の音韻体系や、『五音篇海』『群籍玉篇』に引用される資料の性格を分析する研究も現れた。今後も上記の観点をより仔細に掘り下げる方向での検討が期待される。他の、例えば『廣韻』の略本「禮部韻略」の流れを汲む『平水新刊韻略』等について研究はいまだ多くはなく、他資料との比較を通した位置づけや成書過程といった点について引き続き詳細な検討が期待される。

0. はじめに

金代字書資料については、その内容を容易に見ることができない状況が長らく続いたが、90年代に校本や影印本が刊行されて後は、さまざまな観点からの研究が盛んに行われるようになってきた。本稿では金代の韻書である『五音集韻』および『新刊韻略』、また字書である『五音篇海』『群籍玉篇』に着目して関連する研究を観点ごとに分類・概観し、今後の研究の方向性、また課題について考えてみたい[1)]。

1.『五音集韻』

1.0. 資料概説

韻書『五音集韻』は全15巻。金・韓道昭の撰。正式名称は『改併五音集韻』である。1208年に初版が出され、1212年に増補版が刊行されたとみられる。編纂する上で直接の材料となったのは、金代に通行していた「廣集韻」（成立年・撰者ともに未詳）と呼ばれる韻書の流れを汲む資料で、その反切は『廣韻』をメインとしつつ時に『集韻』反切も用い、収録字については『廣韻』を基盤として『集韻』独自の收字を付加する格好となっている。韻体系は従来の206韻を合併によって160韻へと簡略化する一方、『玉篇』や『龍龕手鑑』等の字書資料を用いて韻書に無かった三千字ほどの字を増やして内容の充実を図った。また各小韻がどの声類に

該当するかを等韻学における三十六字母を用いて明示したが、序によればこの字母の明示それ自体は韓道昭の発案ではなく、金・荊璞が皇統年間（1141－1149）に刊行した韻書に採用されていたものであるという。韓道昭はその字母排列を見母に始まり日母に終わる順に整理しなおし、さらに等韻学や門法に基づいて小韻の移動・合併を行う等の改変を加えている。字形分類の字書である後述『五音類聚四聲篇海』（『五音篇海』）と“篇韻”のペアをなす韻書としても知られる。

1.1. 先行研究概觀

1.1.0. 1994 年ごろまでの研究

1.1.0.0. 音系に関する研究

音系に関しては、『五音集韻』を「宋金語音系統」を代表する資料とみなし、参考資料として『五音集韻』の音韻体系および推定音価を付す崇岡 1982「漢語音韻學的回顧和前瞻」（《語言研究》1982（1)/1－10 頁）や、音韻史研究資料として『五音集韻』はさほど有用ではない、と崇岡 1982 への異議・反論を述べる麥耘 1994「從《五音集韻》的併韻看其韻系的性質」（《語言研究》增刊 6/209－212 頁)、また『五音集韻』の韻目や反切を中心に検討を加え、音系に関して反切繋聯法を用いて得られた詳細な検討結果が記される姜忠姬 1980「《五音集韻》與《廣韻》之比較研究」（臺灣師範大學碩士論文）および姜忠姬 1987《五音集韻研究》（臺灣師範大學博士論文)、『五音集韻』において重紐の対立がすでに消失していると主張する寧繼福 1980「《五音集韻》的重紐假象」（《近代漢語研究》北京・商務印書館/225－234 頁)、『五音集韻』には韻目や反切など編者の意図的な変更である「第一音系」のほかに、編纂関係者の非意図的な行爲、つまりは誤りによって露呈した当事者の言語音体系の断片、いわば「第二音系」が存在することを指摘する寧繼福 1994「韓道昭《五音集韻》第二音系考」（《文史》38/233－247 頁）などがある。

1.1.0.1. 書構造・構成要素に関する研究

該当する研究として、韻目・小韻のレベルでの検討を行い，そこからうかがえる『五音集韻』の性格を明らかにしようとする水谷誠 1979「『五音集韻』について」（『早稲田大學大學院文學研究科紀要』別冊 6/119－149 頁)、字書資料の発展史上における位置づけという観点から、『五音集韻』および『五音篇海』について書誌学的検討を行なう福田襄之介 1980「『五音集韻』および『五音類聚四聲篇海』について」（『岡山大學法文學術紀要』7/31－39 頁)、『五音集韻』と『廣韻』の反切を比較し、『五音集韻』反切の特徴を統計的に導き出す水谷誠 1983「『五音集韻』における『廣韻』と相違する反切用字について」（『中京大學教養論叢』23－4/79－103 頁)、『五音集韻』『五音篇海』『四聲等子』『新刊韻略』を取り上げ、各書の成書過程や特徴、また音韻学史上の意義などを概説する寧繼福 1987「金代漢語語言學述評」（《社會科學戰線》

1981（1)/333－345、264 頁）がある。

1.1.0.2. 他資料との関連についての研究

他資料との関連に着目したものとしては、「五音集韻的韻目與注音方式」「五音集韻與宋元韻圖」「五音集韻與宋元韻書」の三節からなり、構造の整理また他資料との関連についての考察を通じて音韻学史上における『五音集韻』の位置づけを試みる應裕康 1965「論《五音集韻》與宋元韻圖韻書之關係」（《政治大學學報》1965（11)/165－200 頁)、『蒙古字韻』編纂に利用された可能性を有する先行資料の一として『五音集韻』に注目する中村雅之 1993「『蒙古字韻』と『五音集韻』」（『中國語學』240/21－30 頁)、「五音集韻的十六攝與三十六字母」「五音集韻與等韻門法」「從五音集韻推測四聲等子的成書年代」の三節からなり、『五音集韻』の等韻学的特徴を整理した上で『四聲等子』との関係について検証する寧繼福 1994「《五音集韻》與等韻學」（《音韻學研究》3/80－88 頁）などがある。

1.1.0.3. 校本

校本としては、成化本（1471)『五音集韻』を底本に『廣韻』『集韻』『玉篇』『古今韻會擧要』『龍龕手鏡』などを用いて校勘を行い、誤りを訂正、また金元版との異同を記した寧繼福 1992 校訂《五音集韻》（中華書局）がある。

1.1.0.4. 小結

1994 年までの研究においては、例えば『五音集韻』が『廣韻』を藍本とし『集韻』を増補に用いたというのは具体的にいかなる状況を意味するのか、また増補に用いた資料は『集韻』の他に何があるかなど、『五音集韻』の構造や成書過程について必ずしも明確になったとは言えない。また、他資料との関係という点についても、後世への影響を考慮すると検討すべき資料はなお少なくなかった。さらに、『五音集韻』の音系問題については、寧繼福氏の綿密な研究が登場して、ようやく『五音集韻』に音韻史研究資料としての高い価値が見出されたが、ただし、寧氏はいわゆる第二音系の“層”の側面をそれほど考慮しておらず、例の収集という面でも全面的とは言えない部分があるため、寧氏の見解を補足できる余地もなお残されている状況であった。

1.1.1. 1995 年以降

1.1.1.0. 音系に関する研究

音系の問題については、『五音集韻』にみえる音韻史研究に資する可能性を持つ例を、「韻目合併」「韻外移動」「韻内合併」「反切」「新增字帰屬」に大別して分析を加える大岩本幸次 1998「音韻史研究資料としての『五音集韻』」（『集刊東洋學』80/40－59 頁)、董小徵 2006「《五音

集韻》與《切韻指南》韻母系統之比較研究」(《福建論壇・人文社會科學版》2006 (1)/196－197 頁)、『五音集韻』と『切韻指南』とを比較し、『五音集韻』の韻目合併状況は従来の規範を重んじた保守的なもので、実際の言語状況とは異なることを論ずる董小徵 2006「從《五音集韻》的韻母系統看其韻系的性質」(《福建論壇・社科教育版》2006 (1)/152－154 頁)、『廣韻』『集韻』と反切などの要素を比較した上で、韻目合併とそれに伴う小韻合併などについて具体的に整理し、音系についてはいわゆる“第二音系”の例の一部に言及する馬亞平 2008「《五音集韻》研究」(陝西師範大學碩士論文)、韻目合併や小韻の移動・合併・新増などの側面に着目して音系問題を考察する國術平 2008「《五音集韻》與《廣韻》音系比較研究」(山東師範大學碩士論文)、『五音集韻』の小韻移動の状況について対象を開音節の一部に限定して調査した劉錚 2013「《廣韻》止攝、蟹攝與《五音集韻》陰聲韻比較研究」(《金田》2013 (12) 3/412 頁)、主として『廣韻』『集韻』を来源とする異読が『五音集韻』でどのように処理されているかを詳細に調査し、韻目合併などに伴って生じたとみられる音韻史に関わる例について、寧氏の“第二音系”とも関連させて分析する李昌禹 2013「《五音集韻》異讀字研究」(北京大學碩士論文)、『廣韻』『集韻』を来源とする義訓にみえる誤字に、金代の言語音を反映するものがあるとする張義 2016「《五音集韻》引《廣韻》《集韻》異文所見之金代若干語音現象」(《語言研究》2016 (2)/63－66 頁)、『廣韻』『集韻』以外を来源とする新増字の帰属の誤りに、金代語音の反映がみられるとする張義 2016「從《五音集韻》新增字語音折合失誤看金代口語語音現象」(《語言研究》2016 (2)/63－66 頁) などがある。

1.1.1.1. 書構造・編纂過程に関する研究

この方面の研究に該当するとみられるものとして、『五音集韻』の特徴を整理し、先行資料をどう踏襲したかに関する従来の見解に疑義を唱える大岩本幸次 1998「荊璞の『五音集韻』－『五音集韻』の編纂過程に關連して」(『東北大學中國語學文學論集』3/1－18 頁)、『五音篇海』にみえる「餘文」「對韻音訓」といった要素について、それらの基づいた韻書が『五音集韻』に非常に近い内容のものであった可能性を指摘する大岩本幸次 1999「韓道昭『五音篇海』とその依拠した韻書」(『文化』63－1・2/20－41 頁)、正德本『五音集韻』の序文を精読して成立過程・編纂方針など整理、專門家を対象とした書というよりは一般の参考書を目指していたかと述べる岡本勳 2000「『五音集韻』と『古今韻會擧要』(『中京國文學』19/15－25 頁)、『群籍玉篇』に窺える「廣集韻」という資料の内容には『五音集韻』と共通する部分があることを指摘する大岩本幸次 2001「『群籍玉篇』に窺える『增廣類玉篇海』及び『廣集韻』について－その《五音篇海》《五音集韻》との關連」(『大阪市立大學大學院文學研究科紀要』53－4/39－53 頁)[2)]、成立背景・依拠資料・体裁などに関する整理を行った丁桂香 2009「《五音集韻》探源」(《河南教育學院學報・哲學社會科學版》2009 (5)/113－116 頁)、従来は異論のあった荊璞の出身地を河北寧晋と定め、荊璞「五音集韻」の特徴として推測できる事柄を整理する張社

列・孫青 2013「荊璞小考」(《保定學院學報》2013 (3)/85－88 頁)、『五音集韻』の編者、成書過程、構造について整理する張社列・班穎 2013「韓道昭與《五音集韻》」(《河北大學學報・哲學社會科學版》2013 (6)/87－89 頁) などの論考がある。

1.1.1.2. 他資料との關連についての研究

他資料との關連に着目したものとして以下のものがある。従来は『五音集韻』の一版本とされていた『全書集韻』について別種の本であることを指摘、また『全書集韻』に見られる等韻門法に明代中・後期における伝統的な等韻学の衰退が現れていることを指摘する大岩本幸次 2002「『古今字韻全書集韻』について－明代における『五音集韻』受容の一例」(『大阪市立大學大學院文學研究科紀要』54 (4)/1－19 頁)、『韻學集成』に「集韻」として引用される部分を仔細に検討し、それが『集韻』ばかりではなく『五音集韻』から採用されている場合があることなどを指摘する林玉芝 2008「《韻學集成》與《集韻》、《五音集韻》關係考證」(福建師範大學碩士論文)、『書學正韻』の特徴を整理、該書が『集韻』を基盤に据え、『五音集韻』を補助材料として編纂された可能性について述べる大岩本幸次 2011「元・楊桓『書學正韻』と『五音集韻』」(『東北大學中國語學文學論集』15/65－80 頁)、第五章に「喬中和『元韻譜』」という節を収録し、『元韻譜』が『五音集韻』独特の掲出字と義訓を収録することに言及する寧繼福 2009《漢語韻書史・明代卷》(上海人民出版社)、『元韻譜』の義訓に『集韻』とされる資料が実は『五音集韻』であり、『元韻譜』の音系も『五音集韻』をベースにして成った可能性について述べる汪銀峰 2013「《元韻譜》與《五音集韻》」(《華夏文化論壇》2013 (2)/216－222 頁 (いま同氏《元韻譜與明清語音研究》中國社會科學出版社 2016、57－70 頁による)、明代の『合併字學篇韻便覽』が『五音篇海』『五音集韻』を基礎として編まれた事を述べ、その字書史上における位置づけを行う梁慧婧 2015「《合併字學篇韻便覽》在辭書編纂方面的繼承與創新」(《辭書研究》2015 (2)/63－68 頁) などである。

1.1.1.3. 字形に関する研究

字形に関連した内容の研究に以下がある。編者や成書過程など基本的事項を整理、また各種版本で異なる字体となっている例について分類・検討を加える林啓新 2009「《五音集韻》俗字研究」(高雄師範大學碩士論文)、『五音集韻』中の古文 14 字について、音の近似による誤り、形の近似による誤り、意味の近似による誤りの三類に分けて考察する邱龍昇 2016「《五音集韻》古文的誤植字」(《中國文字研究》2016 (2)/145－150 頁)、『五音集韻』中の異体字を「要素の配置が異なる」「要素の書き方が異なる」など分類して考察する董倩 2019「《改併五音集韻》異寫字整理及研究—以十齊爲例」(《遼東學院學報・社會科學版》2019 (2)/75－79 頁)、成立過程・編者・書構造・第二音系などについての総合的に述べる寧繼福 2016「韓道昭《改併五音集韻》」(《漢語音韻史 (金元卷)》上海人民出版社 13－49 頁) などである。

1.1.1.4.　小結

1950 年代から 1990 年ごろにかけては、資料の閲覧が容易でなかったこともあり、該書の特徴であるいわゆる“第一音系”の整理や他書との關係などに基づいて音韻学史上における該書の位置づけを行う研究が多くなされた。その結果、音韻史研究資料としては必ずしも評価が高くはならなかったが、1992 年に金・泰和本の内容を記した校本が刊行され、また該書の序文に“第二音系”に関する概要が示されると、『五音集韻』の音韻体系について個々の文字レベルで調査した補足的な研究や、『廣韻』および『集韻』などの資料との全面的な比較研究が行われるようになった。また、元・明代の資料についても容易に目にできる環境が徐々に整う中で、『五音集韻』が後世の資料に与えた影響などについての研究も登場した。この後世への影響という点では、なお調査の余地は小さくないと思われ、今後も関連する資料を発掘する試みが続けられていくことが期待される。また、資料の成書過程に関連して、後述する『五音篇海』や『群籍玉篇』にみられる「餘文」「對韻音訓」「廣集韻」といった韻書由来の資料と『五音集韻』との関係を明らかにする全面的な比較研究は、『五音集韻』祖本の復元や、祖本から『五音集韻』への展開という側面についてうかがい知るために、行われねばならない課題ではないかと思われる。

2.『五音篇海』および『群籍玉篇』

2.0. 資料概説

2.0.1.『五音篇海』

正式名称は『五音新改併類聚四聲篇』。『五音篇海』あるいは『四聲篇海』とも呼ばれる[3)]。金・韓道昭の撰。全 15 巻。泰和八（1208）年の成立。これに先立つ 1196 年、韓道昭の父である韓孝彦が部首排列に三十六字母を応用した「五音篇」を編纂している。韓孝彦が基にしたのは、『玉篇』や『龍龕手鑑』といった先行字書を集大成し、金代に通行していた王太「增廣類玉篇海」（1164 年）である。王太また韓孝彦の字書では收字の多さから画数分類を採用し、また部首数も 579 部に増えていたとみられるが、韓道昭は父の「五音篇」を直接に継承しつつ、部首数を合併によって 444 部に簡略化する一方、「搜神玉鏡」などの資料を用いて大量の俗字を増補して『五音篇海』を編纂した。先述の『五音集韻』とともに、「画引き字書／音引き韻書」という“篇韻”のペアをなす資料である。

2.0.2.『群籍玉篇』

正式名称は『新脩纍音引證群籍玉篇』。全 30 巻。金の大定二十八（1188）年の成立。編者は邢準といい、滄州清池縣（現河北省滄州）の人。画引き検索法を採用した字書としては最も早期に登場したものの一つである。邢準は『群籍玉篇』の編纂に際して、当時通行の字書を集大

成していた王太「増廣類玉篇海」（1164 年）を基盤に、「廣集韻」（編者・成立年共に未詳）をはじめとする数種の韻書を用いて、掲出字や音義の拡充をはかった。主要な字書・韻書をほぼ網羅する格好となったこの『群籍玉篇』であるが、その当時においては需要があまりなかったためであろうか、現在、『群籍玉篇』は中国の国家図書館に金版が伝わるのみである。資料相互の関連等がいかなるものであったかについて、推測される流れは以下の通り[4)]。

1188　邢準『群籍玉篇』
（字書に韻書の音義を取込む）
↑　　↑

1164 以前？ 王太「増廣類玉篇海」	編者・成立年未詳「廣集韻」
（字書の集大成）	（韻書の集大成？）
↓	↓
1196　韓孝彦「五音篇」	1141―1149　荊璞「五音集韻」？
（三十六字母の導入）	（三十六字母の導入）
↓	↓
1208　韓道昭『五音篇海』	1208　韓道昭『五音集韻』
（部首體系の簡略化）	（韻目體系の簡略化）

2.1.　先行研究概観

2.1.1. 1994 年以前

2.1.1.0. 字書史上に位置づけをはかる研究

これに該当すると思われるものとして、『五音集韻』および『五音篇海』の成立や構造について検討を行ない、『五音篇海』を字書史上における画引き字書の始祖と位置付ける福田襄之介 1956「『五音集韻』および『五音類聚四聲篇海』について」（『岡山大學法文學術紀要』7/31－39 頁）、字形分類字書の宋～金代における発展を論じ、『五音篇海』に関しては序文にみえる「篇海」編者名を従来は「王與秘」と解釈されていたのを「王公」と「秘詳」等と解釈、また道教からの影響などに言及しつつ書の特徴を述べる小川環樹 1962「宋・遼・金時代の字書」（いま 1977『中國語學研究』創文社 242－253 頁による）、また「宋・遼・金・元時代の字書」という章において『五音篇海』所引の「類篇」が宋代に登場した同名の書と別の本である可能性などを指摘する小川環樹 1981「中國の字書」（『日本語の世界』3 中央公論社 231－286 頁）、編者・成立過程・体裁などを整理、字書史上の過渡期を形作る重要資料であること、また佚書を含めて多くの資料を引用する有用性の高さを指摘する周國光 1986「《四聲篇海》瑣論」（《信陽師範學院學報・哲學社會科學版》1986（1）/103－109 頁）、編者・版本・構造・五音集韻との関連・資料的価値などについて解説する徐大英 1986「談談《改併五音類聚四聲篇》」（《辭書

研究》1986（3)/110－116 頁)、編者・収録字数・部首体系簡化・画引法・字母排字法・版本などについての整理・紹介を行う甯繼福 1987「金代漢語語言學述評」(《社會科學戰線》1981(1)/333－345 および 264 頁）および甯繼福 1987「字典史上的一塊豊碑－《四聲篇海》」(《辭書研究》1987（1)/124－130 頁）などがある。

2.1.1.1. 他資料との関連についての研究

他資料との関連については、明代の通俗字書群いわゆる海篇類が『五音篇海』を元にして編まれたことなどを、両者を具体的に比較しつつ述べ、海篇類の字書史上における位置づけをはかる福田襄之介 1960「『字彙』以前における畫引き檢字法の流行」(『岡山大學法文學術紀要』13/164－177 頁）がある。

2.1.1.2. 小結

1994 年以前は上述の『五音集韻』と同様に、依拠するに足るテキストを見ることが容易でなかったという状況が影響して、書の構造についての基本的な考察や、字書史上における位置づけを試みる研究が主とならざるを得なかったが、そうした資料的な制約の中でも、後の研究の基盤となりうる着実な成果が生み出されている。

2.1.2. 1995 年以降

この時期に起こった事柄として注目すべきは影印本の刊行である。『五音篇海』については、北京大学図書館藏明成化三年至七年明釋文儒募刻本が《續修四庫全書》（上海古籍出版社 1995）および《四庫全書存目叢書》（齊魯書社 1997）に収録された。また『新修纍音引證群籍玉篇』については、中国国家図書館所藏金刊本が、《續修四庫全書》（上海古籍出版社 1995）に収録されている。これらの登場によって書の内容が比較的に容易に確認できるようになり、研究もより具体的な検討を行う方向へと変化していく。

2.1.2.0. 成立過程に関する研究

関連する研究として、金版残巻を用いて成書過程や書構成の方式、構成要素の性格などについて検討し、「餘文」「對韻音訓」といった要素の基づいた韻書が『五音集韻』に近い内容であった可能性を指摘する大岩本幸次 1999「韓道昭『五音篇海』とその依拠した韻書」(『文化』63－1・2/20－41 頁)、編者・版本・構成について整理し、画引き字書の先駆的資料としての価値などを指摘、また字母を用いた文字配列、引用の不正確さ、字体の正俗を明瞭に区別しないなどを欠点をみなす張涌泉 2000「論《四聲篇海》」(《文史》2000（3)/179－188 頁)、『群籍玉篇』の成立過程や特徴について検討し、『群籍玉篇』からうかがえる「增廣類玉篇」「廣集韻」の内容と、韓道昭『五音篇海』『五音集韻』二書の内容との間に明らかな共通性があることを指摘

する大岩本幸次 2001「『群籍玉篇』に窺える『增廣類玉篇海』及び『廣集韻』について－その『五音篇海』『五音集韻』との關連」(『大阪市立大學大學院文學研究科紀要』53－4/39－53 頁)、『群籍玉篇』の編者や成立過程、また『五音篇海』との関係について考察、二書ともに『類玉篇海』を祖とするものの、編纂に際して一方を利用したなど直接の関係はないと結論づける梁春勝 2004「從《類玉篇海》到《四聲篇海》－我國字典編纂史上的一箇轉折點」(《中國典籍與文化》2004 (2)/21－26 頁)。『群籍玉篇』『五音篇海』の成立に関する事柄を整理し、また書名に基づいて引用資料の性格に言及する楊正業 2006「《篇海》世家」(《辭書研究》2006 (2)/196－203 頁) などがある。

2.1.2.1. 引用資料の性格に関する研究

引用資料の性格については、『群籍玉篇』中の「玉篇」「龍龕・古龍龕」「川篇・會玉川篇」「類篇・古類篇」「字海・龕玉字海」「奚韻」「切韻・古切韻」「廣韻」「省韻」についてその特徴を整理し、現存資料との関連を検討した大岩本幸次 2005「『群籍玉篇』にみる金代通行の字書・韻書」(『中國學志』20/1－30 頁)、「廣集韻」「省韻」「切韻」ほか編纂に利用された資料の性格について検討し、また『四聲篇海 (五音篇海)』における資料別マークの誤りが多いことを指摘する梁春勝 2008「《新修玉篇》《四聲篇海》引書考」(《中國典籍與文化》2008 (4)/55－60 頁) などがある。

『五音篇海』は大部な資料ということもあってか、修士論文で分担して研究する場合が少なくない。これに該当するものとして、「餘文」の成立を北宋末・南宋初と推定、その反切は基本的に『廣韻』をよく遵守することを指摘する【福建師範大】の呉潔 2007《〈四聲篇海〉所引〈餘文〉音系研究》、【河北大】楊清臣 2008《〈新修玉篇〉與〈四聲篇海〉釋義對比研究》、王碩鵬 2008《〈詳校篇海〉與〈四聲篇海〉字頭對比研究》、紀麗宏 2008《〈新修玉篇〉與〈四聲篇海〉字頭比較研究》、【温州大】崔智慧 2012《〈四聲篇海〉所引〈川篇〉音系研究》、徐凱敏 2012《〈四聲篇海〉所引〈搜眞玉鏡〉研究》、楊苗苗 2012《〈四聲篇海〉所引〈對韻音訓〉與《玉篇》的對比研究》【湖南師範大】鄧國豔 2016《〈四聲篇海〉引〈類篇〉研究》などがある。最後の鄧國豔 2016 では、詳細な検討を通して、『五音篇海』に引用される「類篇」は現在通行の『類篇』とは別種の本であると結論づけている。

また、中国海洋大学の趙曉慶氏が精力的に論考を発表しており、最終的に書籍にまとめられるのではないかと期待される。王麗豔・趙曉慶 2017「金代韻書《廣集韻》考略」(《語文研究》2017 (1)/61－65 頁)、2017「《新修玉篇》引《廣集韻》價値述論」(《中國典籍與文化》2017 (2)/62－70 頁)、2017「金代韻書《廣集韻》與《五音集韻》關系探究」(《古漢語研究》2017 (3)/21－28 頁)、趙曉慶・張民權 2017「《新修玉篇》“《韻》又”探究」(《漢語史研究集刊》2017 (1)/103－121 頁)、2017「《新修玉篇》之《玉篇》底本考」(《中國文字研究》2017 (1)/130－137 頁) など。最後に挙げた論文では、『群籍玉篇』に姿をとどめる「玉篇」について、

その底本が唐・孫強本でもなく宋の『大廣益會玉篇』でもなく、宋代『玉篇』の修訂本であると推測している。

2.1.2.2. 他資料との比較研究

この方面については、学位論文で扱われるケースが確認される。該当するものとして、いずれも河北大学の例であるが、李二忠 2009《〈詳校篇海〉與〈四聲篇海〉釋義對比研究》、王學敏 2009《〈直音篇〉與〈四聲篇海〉釋義對比研究》、白薇 2009《〈直音篇〉與〈四聲篇海〉字頭對比研究》、石杏美 2015《〈海篇群玉〉與〈四聲篇海〉字頭對比研究》がある。こうした研究は新たな視点を見出す可能性も有しており、貴重であると思われる。

2.1.2.3. 版本・校勘に関する研究

版本・校勘に関しては、泰和本など 13 種の版本についての簡略な書誌を記し、継承関係について整理する郭敬燕 2013「《改並四聲篇海》版本考略」(《德州學院學報》2013 (5)/56－69 頁) や、馮先思 2014「從《新修玉篇》看金代刻書避諱」(《版本目錄學研究》5/551－564 頁)、熊加全 2016「《新修玉篇》釋義失誤辨正」(《中南大學學報 (社會科學版) 》2016 (6)/209－214 頁) などがあり、ほかにいずれも河北大学の学位論文で扱われた、王亞彬 2017《泰和本〈篇海〉(卷二至卷三) 與明刻本對比研究》、李哲 2017《泰和本〈篇海〉(五、六卷) 與明刻諸本對比研究》呂亞斯 2017《泰和本〈篇海〉(八、九卷) 與明刻本對比研究》といった版本比較研究がある。先述した中にも例があったが、こうした修士論文でチームを組んで行われる網羅的な基礎研究は、研究の新たな視点を見出す可能性も有しており、貴重であると思われる。

2.1.2.4. 字形に関する研究

字形に関しては楊清臣 2011「利用《新修玉篇》考辨疑難俗字」(《河北大學學報・哲學社會科學版》2011 (3)/71－73 頁)、朱曉琳 2016「從《四聲篇海》引“俗字背篇”看俗字産生的方式」(《語文學刊》2016 (4)/44－45 頁)、熊加全 2017「《新修玉篇》疑難字考」(《古籍研究》2017 (1)/277－286 頁) といった論文がある。最後に挙げた論文では、『群籍玉篇』から難字を 20 字ほど抽出し、『五音篇海』や明代の『正字通』『字彙』などの資料と比較しつつ義訓の正誤を検討している。

2.1.2.5. 小結

1995 年に『五音篇海』および『群籍玉篇』の影印本が刊行されて以降は、『五音篇海』と『群籍玉篇』二書の関係や、それぞれの書の成立過程、また大量に引用されている個々の資料の性格について具体的に調査することが可能となり、基礎的な知見が蓄積して大きな研究の進展があった。ただ、大部な資料であるため、未踏の部分も少なくない。今後も従来の観点を受

け継ぎつつ補完的な作業が進められていくのではないかと予想される。そうした中で大小さまざまな観点からの論考が登場すると推測されるが、さらなる研究の前進のためには、『五音集韻』の場合に編まれた『校訂五音集韻』のような詳細な校勘結果を記した校本があることが望ましい。『五音集韻』も同様であったが、『五音篇海』でも金・元版と明版との間に内容的な差異の小さくないことは知られており、現在のところ部分的には版本間の比較・修正などの作業は進んでいるとみられるが、全面的な校勘の達成という意味ではまだゴールは遠い状況である。こうした版本比較、緻密な校勘作業を行う中で、『五音集韻』に確認されたような、ある文字を別の同音字に誤るといった類のいわゆる“第二音系”のような例がまとまって発見されないか期待されるところである。

3.『新刊韻略』

3.0. 資料概説

金・王文郁の撰。正大六（1229）年の序。王文郁は平水（山西省平陽）で印刷・出版に携わる人物であったとみられ、『平水新刊韻略』とも呼ばれる。版本については元・大德十（1306）年重刊本が臺灣・國家圖書館に所蔵され、清抄本とされるテキストが中国また日本にそれぞれ一種を存する。この書の最大の特徴は、内容の大部分を『廣韻』に拠り、韻目合併によって『廣韻』206 韻を 106 韻に圧縮している事である。恐らくは「禮部韻略」の通用規定により 108 まで合併し、更に「證（嶝）」韻を径韻に、また「拯（等）」韻を迥韻に併合して 106 韻を得たとみられる。この体系は後に平水韻と呼ばれ、明清を経て現在に至るまで詩韻の基準である。必ずしも王文郁の発案によるものではなく、序に拠れば王書以前に坊刻書で 106 韻の韻書が登場していたようである。

3.1. 先行研究概觀

3.1.1. 成書過程についての研究

これに該当するとみられる研究として、『新刊韻略』や劉淵「壬子新刊禮部韻略」また『古今韻會擧要』など平水韻に関わる資料それぞれの成立年や『山西通史』などの関連記録をもとに、平水は平陽の意であり『新刊韻略』序にいう「私韻」とは毛麾の編んだ「平水韻」である可能性を述べる張守中 1982「《平水韻》考」（《山西大學學報・哲學社會科學版》1982（1）/93－96 頁）、『新刊韻略』106 韻が劉淵「壬子新刊禮部韻略」107 韻をもとに編まれたのであり、その逆を考えるのは合理的でないとして、劉書の成立は王書より前の紹熙壬子（1192）の年とする揚琳 1993「《平水韻》的得名及成書時間考」（《文獻》1993（4）：249－254 頁）、第三章「景德韻略與新刊韻略」において『新刊韻略』の構成要素を詳細に検討し、王書が「景德韻略」をもとに韻目合併および種々の増補をおこなって成ったことを述べる甯繼福 1994《古今韻會擧

要》及相關韻書（北京：中華書局)、『古今韻會擧要』に引かれる劉淵「壬子新刊禮部韻略」の断片と『新刊韻略』の内容を比較し、前者は後者の翻刻本であるとする甯繼福 1995「《平水韻》考辨」(《中國語言學報》7/139－149 頁)、清人の記録に基づき劉書は王書を参考にした可能性が高いと判断、劉書ではなく王書が平水韻の先駆であると述べる孫玉祥 1999「平水韻 106 部最早爲金人王文郁所定」(《晉陽學刊》1999（6)/99 頁)、許序を有する「正大己丑」本は第二版であり，初版は金・大定六（1166）年に平水の書坊から「增注禮部韻略」という書名で王文郁によって編纂・刊行されたとする沈文凡 2004「明代近體律詩題標“平水韻”緝考」(《古籍整理研究學刊》2004（6)：49－53 頁）などがある。

3.1.2.　書構成・構成要素に関する研究

このテーマについては、先の 1）で挙げた研究に関連する内容が含まれるが、ほかに、編者・書名・成書過程・体裁・版本について整理し、声類・韻類に関する詳細な検討をもとに推定音価を示す陳瑤玲 1991《新刊韻略》研究（文化大學中文所碩士論文）がある。この論文ではさらに『廣韻』や『韻會』に残る劉淵「壬子新刊禮部韻略」と『新刊韻略』との内容比較を行い、『新刊韻略』は「景佑韻略」の同用例に基づいて合併すること、また劉書が『集韻』系であることなどが指摘されている。このほか、台湾・国家図書館所蔵の元版を『廣韻』と全面的に比較して『新刊韻略』の構成要素に関する従来の見解について再検討を行った大岩本幸次 2006「金・王文郁『新刊韻略』について」(『大阪市立大學大學院文學研究科紀要』57/69－111 頁）がある。この論文では、『新刊韻略』の特徴をふまえて成立過程等について概略を整理し、その祖本がこれまで指摘されてきたような官刻の韻書ではなく、民間の書坊より刊行されたものであることなどを指摘している。また、王芳芳 2014《新刊韻略》與《廣韻》之關係（吉林大學碩士論文）では、韻分部や反切、小韻代表字などを詳細に比較し、『新刊韻略』が「景德韻略」に基づく金代の官韻をもとに編まれ、さらに『五音集韻』などの資料を利用し、金代の字音も取り入れていると結論する。同様の結論を持つものに李子君 2014「《新刊韻略》《廣韻》考異」(《華夏文化論壇》2014（2)/179－188 頁）があり、この論文では『新刊韻略』について『廣韻』との反切・小韻代表字などにおける差異に着目して検討、『新刊韻略』は「景德韻略」を基礎として編まれ、さらに金代の音韻も一部に含んでいることを指摘する。

3.1.3. 他資料との比較研究

関連する研究として、「“平水韻”的代表作『新刊韻略』」という節を設けて書の特徴や他の平水韻系の韻書との韻目異同などに関する概略を述べる甯繼福 1987「金代漢語語言學述評」(《社會科學戰線》1981（1)/333－345 また 264 頁)、敦煌から発見された韻略系韻書『排字韻』について 106 韻體系であること、また『廣韻』略本であることが指摘されるが（張金泉 2001「莫高窟新出土的古韻書《排字韻》」(《敦煌研究》2001（1)/151－160 頁)、高田時雄 2004「莫

高窟北區石窟發現《排字韻》劄記」(《敦煌學》25/303－310 頁）ではそれに加えて、該書が『新刊韻略』と内容をほぼ同じくする資料であることを指摘する。ほかに、西夏時代の遺跡から出土した「TK.5」という韻略系の資料を調査し、106 韻體系で詞藻を付加する点を特徴とする金代の韻略は宋代のものとは独立した資料であり、「TK.5」はその早期の姿、『新刊韻略』は官韻の増補版とみなすことができるとして、「景德韻略」との直接の関係について疑義を呈する張民權・田迪 2014「金代《禮部韻略》及相關韻書研究」(《中國語言學報》16：243－257 頁）などがある。このほかに、『蒙古字韻』が『新刊韻略』を基礎として編まれていることを検証、『蒙古字韻』の校勘へ活用できる可能性について指摘する甯繼福 1994「《蒙古字韻》與《平水韻》」(《語言研究》1994（2)/128－132 頁）や、張民權・田迪 2016「《蒙古字韻》編撰與校勘情況」(《中國語言學報》17/205－214 頁）など、『蒙古字韻』との關係において『新刊韻略』に言及する論考が多数ある。

3.2. 小結

『新刊韻略』について、この資料は現在でも容易に見られる資料ではないこともあって、研究はそう多くはなされていない。先行研究の内容に少し言及すると、例えば寧繼福氏の研究に、金代字書史の流れの中で『新刊韻略』に言及して『廣韻』系であることを指摘するもの（1987「金代漢語語言學述評」《社會科學戰線》1987（1)/333－345、264 頁）があり、その後に同氏の詳細な研究が出て、『新刊韻略』の内容は宋代の廣韻系「景德韻略」を受け継いだものとする結論が示されている（1994「景德《韻略》與《新刊韻略》」《古今韻會擧要及相關韻書》中華書局、114－133 頁)。この見解に現時点で異論は無いものの、『新刊韻略』がはたして「景德韻略」を引き継いだのか、あるいは新たに『廣韻』に基づいて編まれたのかについては、実のところ見極めは難しいと思われ、該書が『廣韻』系の「景德韻略」を引き継いだという見方を前提とせず、慎重に研究を進めるべきであろう。また、寧繼福氏は『新刊韻略』と劉淵「壬子新刊禮部韻略」とが内容的に全く同じ翻刻本であると説く（1995「《平水韻》考辨」《中國語言學報》7/139－149 頁)。興味深い説であるが、後者が現存しない現在においてはやはり推測の域を出ていない。こうした細かい問題をどう考えるか、なお今後に慎重な議論が必要であろうと思われる。いずれにしても、『新刊韻略』研究が今後さらに進展するために、まずは現在の資料的制約という問題を解消する必要があるのではないかと思われ、詳細な校勘を伴った校本の完成が期待される。

【注】

1）本稿は第 64 回国際東方学者会議（東京会議）シンポジウムⅡ「中国中古期と日本の古辞書研究の現在」(2019 年 5 月 18 日，於日本教育会館）における研究展望報告「集韻系資料と金代音韻」の一部である。

2）また、『五音集韻』についての論考ではないが、大岩本幸次 2011「『皇極經世解起數訣』「聲音韻譜」

について」（『日本中國學會報』63，63－79 頁）では、『皇極經世解起數訣』序文にみえる「總明韻」という資料が『五音集韻』と関連を有する可能性について言及している。

3）『五音新改併類聚四聲篇』が字書として独特であるのは「五音」に基づいて字を整理した点にあり、また『五音集韻』との対称性も考慮して、本稿では「四声篇海」ではなく「五音篇海」という名称を用いる。

4）大岩本幸次 2001「『群籍玉篇』に窺える『增廣類玉篇海』及び『廣集韻』について－その『五音篇海』『五音集韻』との關連」（『大阪市立大學大學院文學研究科紀要』53－4）51 頁、また同 2007『金代字書の研究』（東北大学出版会）187 頁に所掲の表を抜粋したもの。

An Overview of Research on the Dictionaries Compiled in Chin Period

OIWAMOTO Koji

With regard to Chin-Period materials, research was carried out from the 1950s to 1980s, attempting to situate the Wu-yin ji-yun（五音集韻）and Wu-yin pian-hai（五音篇海）in the history of Chinese phonology and character dictionaries, and basic information about the structure of these two works, characteristics of their *fan-qie*, and links with other materials was accumulated. Once critical editions and photo facsimiles of the above two works and the *Qun-ji yu-pian* were published after 1990, detailed investigations at the level of individual characters became possible, and there also appeared studies analyzing the phonological system of the *Wu-yin ji-yun* and the character of materials quoted in the *Wu-yin pian-hai* and *Qun-ji yu-pian*. It is to be hoped that in the future investigations will be conducted that delve in greater detail into the above perspectives. There is still not much research on other works such as the *Ping-shui xin-kan yun-lüe*, deriving from the *Li-bu yun-lüe*, an abridgement of the *Guang-yun*, and it is to be hoped that detailed examinations of their position and compilation will be carried out through comparison with other materials.